

『南山神学』35号（2012年3月）pp. 135-156.

## 関寛之の宗教性発達理論について

西脇 良

### 問題提起

日本における宗教心理学の歩みを振り返ろうとする者は、関寛之（1890-1963）の存在を看過することができない。東洋大学で東洋倫理を専攻し1914年に卒業した関は、高島平三郎（1865-1946）の下で児童学を学び、児童学・児童心理学の研究者として出発した。東洋大学講師時代、また1924年に東洋大学教授に就任して以降も、児童心理学に関する書を出版し続け、この分野での研究活動は続いた。他方、1920年に『児童学に基づける宗教教育及び日曜学校』を発表して、児童心理学に基礎づけられた児童期の宗教心の研究に傾注し始め、1944年に発表した集大成の書『日本児童宗教の研究』に至るまで、一貫して宗教心理学領域での調査研究に専心し続けたのである<sup>1</sup>。

とくに関の最後の著作となった『日本児童宗教の研究』は、研究規模の大きさとその精緻から、竹中信常をして「児童宗教研究のオメガ<sup>2</sup>」と言わしめた大著であった。また最近になって、久しぶりに刊行された宗教心理学の概説書『宗教心理学概論』（金児曉嗣監修，2011）においても、日本における宗教心理学研究史上に大きな足跡を残した人物として取り上げられている<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 児童学の専門家として出発した関がとくに児童の「宗教心」に関心を寄せることとなった経緯については、同書序文に記されているように、おそらく彼の私的体験（相次ぐ近親者の死）があったであろう。関寛之（1920）. 児童学に基づける宗教教育及び日曜学校 洛陽堂

<sup>2</sup> 竹中信常（1957）. 宗教心理の研究 青山書院 p. 224.

<sup>3</sup> 金児曉嗣（監修） 松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良（編）（2011）. 宗教心理学概論 ナカニシヤ出版

しかし残念ながら、彼の残した研究成果について詳細に検討した研究は、管見の限りでは見当たらない。最初の著作となった1918年の『児童学概論』から1944年の『日本児童宗教の研究』に至る26年間にわたる彼の研究成果の全貌をつかむことは、もちろん、時間と労力を要する作業となるだろう。しかしながら、心理学、とくに児童心理学に精通し、心理学的関心から児童期の宗教性の問題を追い続けた彼の研究について、これをていねいに振り返り、その成果を明らかにすることができれば、日本の宗教心理学の歩みをより鮮明に描くことにつながるはずである。そればかりか、子どもの宗教性発達に関する今後の研究にも有益な示唆を与えるにちがいない。

そこで本小論では、彼の主著『日本児童宗教の研究』を中心に、児童期の宗教性発達に関する彼の理論を検討することにする。まず第1に、彼が児童期の宗教性発達をどのように捉えていたかについて検討する(1.)そして第2に、加齢と共に発達する宗教性を「発達段階」としてまとめる彼の議論に着目し、その特徴を浮き彫りにする(2.) こうしたレビューを行うことで、「関寛之研究」ともいうべき研究の端緒を切りたい。

## 1. 宗教傾性の発達

### 1.1. 「宗教」および「発達」の定義

児童の宗教性発達を論じるにあたり関は、基礎的概念である「宗教」および「発達」について明らかにしようとする。まず彼は、宗教の本質を「神の属性」のうちに見出し、宗教を神の属性と定義づける。「...典型たる宗教本質は、成熟文化宗教に於て、神の属性の中に最もよく之を見出だし得ると思うのである<sup>4</sup>」。なぜなら神は、人間の宗教性の「捨象であり、投影であり、対象であり、生命の宗教生活を営む準繩<sup>5</sup>」であるから、という。神の属性として彼が挙げるもの

<sup>4</sup> 関寛之(1944). 日本児童宗教の研究 彰考書院 p. 103.

<sup>5</sup> 前掲書, p. 103.

は、(全能者としての)存在, 超越, 人格性, 神聖, 永遠, 倫理性, 自己啓示, 愛, 福祉, (福祉による)生命自身の拡充, などの特徴である。

次に彼は、「発達」の語について、「生命活動に伴う生命価値の上昇<sup>6</sup>」と定義し、価値の上昇の意味を含まない「変化」および「継続」の語, また量的増加を意味する「増加」, 機械的な集合の意味合いの強い「集合」の語とは区別する。さらに、発達を、①「成熟すなわち成長」としての発達と、②「経験すなわち学習としての発達」とに区別する。前者は遺伝特質に基づく発達過程であり、後者は人間が素質と環境との輻輳から習得性を築いてゆく発達過程である。そしてこれら「成熟と学習との合奏」が発達である、とする。

## 1.2. 「宗教傾性」

いうまでもなく児童は、特定の宗教伝統を有する社会(関は「伝統」の語にかえて「伝承」の語を用いている)の中に生まれ、その伝統を吸収することで宗教性を育てていく。換言すれば、児童は社会の中で宗教を発見するのである。しかし関にとって児童による宗教伝統の吸収は、単なる宗教知識の獲得ではなく、宗教経験である。「しかし、歴史ある社会の中に宗教を発見したということは、単なる宗教知識を認識したということではない。伝承を通して宗教経験をするとということである<sup>7</sup>」。そして彼は、この宗教経験を可能にさせる児童の側の心性を「宗教傾性」と呼ぶ。

宗教傾性とは、「生命の宗教活動を生起し可能にする生命自身の具有する傾向<sup>8</sup>」のことである。ここで注意したいのは、彼が人間の生命活動全体を視野に入れており、「全生命の可能性及び方向性を含むもの<sup>9</sup>」を宗教傾性と呼んでい

<sup>6</sup> 前掲書, p. 107.

<sup>7</sup> 前掲書, p. 108.

<sup>8</sup> 前掲書, p. 109.

<sup>9</sup> 前掲書, *ibid.*

る、という点である<sup>10</sup>。彼は、宗教傾性を「生命拡充傾性」と「生命拡充規定傾性」の2つの傾性から成るもの、と捉える。生命拡充傾性とは、「宗教的存在を、生産し又は発見し、それと結合し、それから限りない福祉を享けて、生命自身を拡充してゆく傾性<sup>11</sup>」である。宗教的存在を創出する側面と、宗教的存在からの恩恵を享受する側面とにより、宗教生活を拡充しようとする児童の心性を指す。また、生命拡充規定傾性とは、「生命拡充傾性が活動して宗教を生起し活動させる時...それを規定して特質を与える」傾性であり、「児童心性を構成する色々の力の特徴を抽象した名称<sup>12</sup>」である。換言すれば、児童の宗教に、児童宗教らしさを与える一切の心的傾性を指す。そして、これら2つの傾性は、それぞれに下部構造をもつ。宗教傾性の構造とその内容を、Table 1 に示した。

関によればこの宗教傾性は、たとえ混沌未分な状態であれ、嬰兒にもみられる。その例として彼は授乳を挙げ、「嬰兒は、まだ客観的に自己生命の拡充を自覚することは出来ないが、母乳を飲んでその時期に於ける全生命の要求の満足として福祉を体験する<sup>13</sup>」、と説明している。

以上のように児童の宗教性発達を説明する基礎的概念として「宗教傾性」を設定したうえで、児童の宗教性発達とは宗教傾性の発達に他ならない、と関はいう。「...結局、児童宗教の発達は、宗教傾性の児童期を通じての発達に外ならない<sup>14</sup>」。ただし、前項でみたように、発達とは、成熟と学習・経験との「合奏」

---

<sup>10</sup> 児童の宗教性発達を論じるにあたり、このように児童の生命活動全体の文脈の中から捉えようとする関の考え方は、以下の文章からも観てとれる。「児童宗教は、児童の全生命のことであるから、その発達は、全生命の発達と分離して考えることは出来ない。又、全生命の発達は、独り聖なる生活の発達とは限らず、俗なる生活の発達も含むので、斯方面の発達をも分離して考えることは出来ない。そこで、全生命の事を宗教の生起から見て宗教傾性と名付け、これを生起の基礎としたのであるが…」(前掲書, p. 132.)

<sup>11</sup> 前掲書, p. 109.

<sup>12</sup> 前掲書, p. 111.

<sup>13</sup> 前掲書, p. 114.

<sup>14</sup> 前掲書, p. 132.

Table 1 宗教傾性の構造および内容

宗教傾性の構造	各要素の内容
生命拡充傾性	宗教的存在を生産し、発見し、それと結合し、それから福祉を享けて、生命自身（人間）を拡充させる傾性。
自我拡充傾性	人間の可能性と方向性を拡充させる傾性。
生命存続性	生命の存続欲求。栄養及び防御の中に現れる。
生命充実性	生命の内容を充実し豊富にする欲求。好奇、試行、蓄財、研学、修養などの活動の中に現れる。
生命拡張性	生命の外延を拡大する欲求。支配欲、権勢欲、他から承認される悦び、賛同を求める傾向、群居傾向、同化及び類化、活化、擬人、虚装、愛情すなわち人格融合傾向等の中に現れる。
生命自主性	生命の活きている事実としての生動及び自主の欲求として、自是、独立の愛好、遊戯・言語・描画・彫塑・音楽・演劇などの行動及び所作等としての表現活動などの中に現れる。
生命統一性	生命の充実と拡張とを常に或る基準に統一するもの。理想の形成、向上、補償作用などの中に現れる。
生命永存性	存続し、充実し、拡張し、自主独立であり、統一し、又は統一しつつある生命を、永遠不滅にしようとする欲求。生殖、靈魂不滅の信仰、転生や輪廻の思想及び信仰などの中に現れる。
対象生産傾性	宗教伝承のある社会に生まれた人間に、宗教対象を発見させる傾性。
自我結合傾性	宗教的存在と結合して、福祉を享けようとする傾性。
生命拡充規定傾性	生命拡充にあたって宗教に特殊の色づけをする傾性。
特殊規定傾性	児童宗教として特徴づける傾性。
心性（一般心性）	児童宗教の特質をうむ。自我拡充傾性のなかに普遍している。
個性（特殊心性）	児童宗教の類型をうむ。自我拡充傾性のなかに普遍している。
環境規定傾性	環境上の事実に、宗教生活上の意味を付与する傾性。
社会条件	社会経済的条件、教育や宗教伝承の条件。
自然条件	気候、風土、自然現象など。
直接精神条件	健康状態、個人の特異経験、情緒（寂寥、追慕、不安、靈威、感謝、希求など）など。自我結合傾性とも共通する。

関寛之（1944）. pp. 109-113. をもとに作成。

であるから、児童の宗教性発達には宗教傾性の成熟のみならず、宗教経験の蓄積や学習が必要となる、という。

### 1. 3. 宗教傾性の発達

宗教傾性の発達をもって児童宗教の発達としたうえで、次に関は、その発達プロセスを明らかにしようとする。彼によれば、宗教傾性の発達は、児童が「人格体験」、「社会経験」、「自然経験」を積むことにより遂げられていく。

まず人格体験とは、「一生命たる人格が、他の生命たる人格との接触に依って、一種の経験を積むこと<sup>15</sup>」である。母子関係を典型とする家族などの身近な人々との間の人格の接触を通して愛と信頼の体験を積んだり、現在あるいは歴史上の人物との直接・間接の接触を通して畏怖・讃仰・憧憬などの経験を積んだりする。これらの人格接触体験を通して児童は、感化を受けていく。

次に社会経験とは、「伝承、行事、教育、既成宗教、読物などの文化や生活から、宗教知識を習得して、宗教的存在自体、それに対する宗教上の儀礼、生命の必至痛切を訴える対象や仕方、既に成形せる宗教の中に自身の宗教を発見すると共に、此等に対応した宗教感情を生起し経験する<sup>16</sup>」ことである。児童は、伝承などから宗教的存在や霊的存在の知識を獲得し、そこに児童の想像力が働くことで、神秘・畏怖・霊異の経験を積むとともに、宗教儀礼や民間行事に参加したり、それらを模倣したりしながら、宗教を学習してゆく。

そして自然体験とは、「自然現象や自然複合現象<sup>17</sup>との関係から、神秘、恐怖、霊威、その他の宗教感情を経験する<sup>18</sup>」ことである。自然現象は、児童の

<sup>15</sup> 前掲書, *ibid.*

<sup>16</sup> 前掲書, p. 133.

<sup>17</sup> 関は自然複合現象について脚注の中で「自然現象と人為現象とが複合して、恰も一種の自然現象的環境を成しているもの」(前掲書, p. 764.)と説明し、晩鐘、墳墓、古城などを挙げている。

<sup>18</sup> 前掲書, p. 133.

生活や感情生起の在り方を風土として特徴づけるが、この風土が宗教上の特質をも規定していく。

このように児童の宗教性発達に欠かせない3つの体験ないし経験を描いたうえで関は、次に、その発達プロセスを説明する。彼はその際、宗教性発達を「倫理的側面」と「自然的側面」とに大別し、両側面の発達を準備する2つの宗教体験（信頼者<sup>19</sup>との接触、および宗教感情）をキーワードに説明する。

宗教の倫理的側面の発達を準備するものとして関は、嬰兒（新生児・乳児）における信頼者との接触、とりわけ母との接触を挙げる。嬰兒は乳を求め、母親はそれを与える。嬰兒は、母親との接触により、生命を繋ぐ食物とそれを与える母との渾沌たる全体と自己とを融合させている。そこに児童の福祉（幸福）体験があり、福祉を与える母親は宗教的存在と同等の地位にある、と関は考える。「吾々の福祉は、宗教的存在が与えるが、嬰兒には、母を代表とする愛する人々が与える。…児童の福祉体験の原初態はここに出発し、母は宗教的存在の地位にある<sup>20</sup>」。

次に、宗教の自然的側面の発達を準備するものとして挙げられるのが宗教感情の体験である。「かく宗教の倫理側面の準備たる宗教体験が、人格体験として積まれる他面に、人格体験、社会経験及び特に自然経験において、宗教感情が経験されて、宗教の自然側面の準備たる発達が進む<sup>21</sup>」。児童は、社会における伝承から神秘的存在・靈異現象・怪奇現象について知ること、想像力も発揮させながら、神秘や恐怖といった宗教感情を生起させていく。その機会が多くなると宗教感情がさらに発達し、やがて宗教感情の生起そのものを宗教的存在の属性とみなすようになる。また、自然現象及び自然複合現象は、どの児

<sup>19</sup> 関は「信頼者」の語を、「児童を愛して彼に愛の体験をさせ、彼から依従し信頼され、愛の恵みを与える人々」の意味で用い、それら養育者の代表として母親を挙げている。前掲書、p. 765。注 (9) 参照。

<sup>20</sup> 前掲書、p. 135。

<sup>21</sup> 前掲書、p. 138。

童の環境にも存在するため、そのもとで生起する感情もより身近である。具体的には倫理感情（感謝、憐憫、思慕、親愛、慈愛など）、宗教感情（莊嚴・森嚴・静寂・寂寥・靈異・不可解などの神秘系統、讃仰・敬虔・依従・尊敬・恐怖などの畏怖系統、無常・悠久等の無限系統を含む）、美的感情が生起されるという。

他方、児童が言語を獲得し知識の習得が可能になると、周囲とくに家族から宗教に関する知識を得ていく。すなわち、宗教的存在の名称、それに対する儀礼、それと人間との関係についての知識などである。宗教的存在は神仏に限らず、民間信仰や迷信の対象であったりする。「かく、児童は、伝承から宗教知識を得、宗教的存在を認識の対象として表象する<sup>22</sup>」。ここで留意すべきは、伝承を児童がそのまま受容するわけではない、という点である。児童は、自分に理解可能な範囲の事柄を、また理解可能な内容へと変更を加えながら受容していく、と関はいう。「併し、児童は、決して単なる伝承の容器ではない。本性の可能な限界内で伝承を受容し、本性の可能な変更を加えてこれを受容する<sup>23</sup>」。

一方で宗教性発達を準備する宗教体験（母子接触と宗教感情）を積み、他方で伝承に変更を加えつつ宗教知識として受容した児童は、次に、これらを結合させて、「人格宗教体験を味得する」出来事へと進む。この出来事へ至るには、「限りない児童の生命の要求と、母を代表とする人間たる『信頼者』のもつ全能性に向かつての批判の発達<sup>24</sup>」が必要である。自分の生活世界には信頼者の力さえ及ばない事柄（天候や試験結果など）があるのだ、という認識に至るまでに児童の批判力が発達してくると、児童は、自らの「生命の必死痛切な要求」と、信頼者の有限性との間で大いに困惑する。このことが、児童を次のステップへと向かわせる発達の契機となる、と関はいう。このとき力を発揮するのが、児童が「伝承」（宗教伝統）から獲得した宗教知識である。児童は伝承から、

---

<sup>22</sup> 前掲書, p. 141.

<sup>23</sup> 前掲書, *ibid.*

<sup>24</sup> 前掲書, *ibid.*

宗教的存在への祈願という事態打開の方法を学んでいる。そこで児童は、その知識を用いて実践を試みるわけである。祈願の結果が児童の要求通りであれば、宗教的存在の靈異に驚き、感謝の感情を培うとともに、宗教的存在との間に人格上の結合が起きる。また、もし祈願の結果が児童の要求通りでなくとも、児童は自らの祈願の仕方欠点や、供犠の少量に原因を求め、宗教的存在の力を疑わない。関によればこれは、児童が伝承の暗示性に規定されているためである。こうして児童は徐々に、宗教的存在との人格的なやりとりを通じて、宗教体験を積んでいく。

この、準備としての宗教体験と、宗教知識との結合によりもたらされる新たな宗教体験の特徴については、5つの要点でまとめている。すなわち、①「真の宗教体験」が展開し始め、②信頼者との間で味わっていた福祉体験が、神（宗教的存在）との福祉体験へと変化し、③それにより神（宗教的存在）に対する真の儀礼と態度が生じ、④神（宗教的存在）への真の感謝や神聖さの感情を体験すると同時に、神に希求し、神を利用しようとする態度が現れ、⑤神（宗教的存在）に対する恐怖が、伝承から得た宗教知識としての恐怖と、福祉を希求するあまり対立概念として生起してくる恐怖との二経路から生まれる点である<sup>25</sup>。

以上の児童の宗教性発達プロセスをモデル化すれば、Fig.1 の通りとなる。宗教的存在との人格的な体験、すなわち真の宗教体験を積むことが、児童の宗教性発達の要である。その前提として、宗教性発達を準備する宗教体験（福祉体験と倫理的・宗教的・美的感情）、および宗教知識の獲得が設定されている。準備としての宗教体験、あるいは宗教知識のいずれか一方のみでは、新たな宗教体験は生まれない。両者の結合が必要である。また、その結合は自動的になされるのではなく、信頼者が全能ではないという批判的認識と、児童自身のもつ「必死痛切な要求」とが発達上の契機として必要である。このモデルの特徴

---

<sup>25</sup> 前掲書, pp. 144-145.

は、宗教知識と（準備としての）宗教体験との結合をもって「真の宗教体験」の生起とする点にあるが、関はこれを「ヤドカリ」にたとえて説明している<sup>26</sup>。それによると、ヤドカリの殻に相当するのが宗教知識であり、その本体に相当するのが準備としての宗教体験である。宗教知識と準備段階としての宗教体験

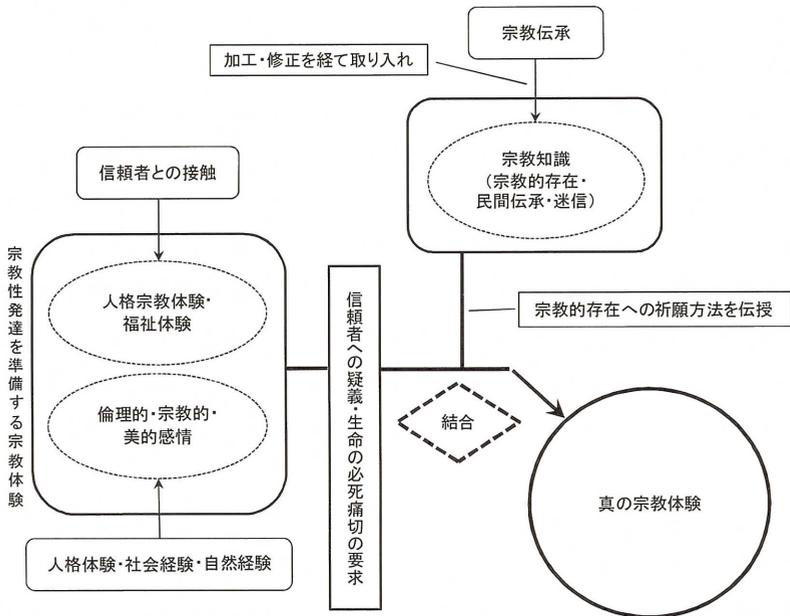


Fig. 1 関（1944）による児童の宗教性発達モデル

関寛之（1944）. pp. 135-145. をもとに作成。

<sup>26</sup> 前掲書, p.143.

は、児童の内的体験として一体となり、新たな宗教体験、すなわち「真の宗教体験」となるのである。

## 2. 宗教性発達段階論

前項では、関の宗教性発達論を「宗教傾性の発達」として捉え、その概要の把握に努めた。本項においては次に、彼の発達段階論をみてゆきたい。まず、関において、児童の宗教性発達を「段階」に区分して説明することの意味はどこにあるのか、という点を明らかにしておこう。次に、発達段階論と、前項で扱われた「宗教傾性の発達」との関係はいかなるものであるかを明らかにした上で、個々の発達段階をみていくことにしたい。

### 2.1. 発達段階の意味

関がその発達段階論を展開するときの出発点となるのは、宗教性発達における「自然的発達」と「回心的発達」の区別である（関、1929a, 1929b, 1933）。自然的発達とは、人間が社会の中で成長してゆくままに、自然のままに起こる宗教性発達である。「…人間は自然のままに於いても或る程度の宗教心は起こるのである。これを宗教心の自然的発達という<sup>27)</sup>。これに対して回心的発達とは、「人間の性格に一種の急激な変化が起って宗教的信仰にはいる現象<sup>28)</sup>」である。回心的発達が急激に現れるのに対し、自然的発達は「漸進的段階を経て進行する<sup>29)</sup>」。すなわち、児童の宗教性発達を、回心的発達とは区別された自然的発達に限定し、「漸進的段階を経て進行」してゆく様相として記述しようとするのが、発達段階論である。

さらに、関によれば、宗教性発達の自然的発達を描く際、縦断的な捉え方と横断的な捉え方とがある（関、1929b, 1933, 1934）。縦断的な捉え方とは、

<sup>27)</sup> 関寛之（1929a）. 児童の宗教心理及教育 二松堂 p.28.

<sup>28)</sup> 関寛之（1933）. 児童の宗教意識 宗教生活叢書 13 大東出版社 p.34

<sup>29)</sup> 関（1929a）, 前掲書, p.28.

「年齢の進むに従って漸次に発達して行く姿を縦断して観た方面<sup>30</sup>」, 「発達してゆく経路を縦にみること<sup>31</sup>」, 「年齢を縦貫して発達の状態を辿る<sup>32</sup>」ことである。また横断的な捉え方とは, 「或る年齢又は時期を横断して観た方面<sup>33</sup>」, 「各発達段階におけるものを横にみること<sup>34</sup>」, 「典型的児童時期の宗教意識の構成及び特性を横断面観的に明にする<sup>35</sup>」ことである。要するに, 児童の宗教性発達について, その平均的な発達像を加齢に即して記述していくのが縦断的な捉え方, 或る発達時期における宗教性発達の内容を記述していくのが横断的な捉え方, ということになる。そして, これら二者のうち, 発達段階論は縦断的な捉え方に基づく, と関は考えている。それゆえ, 関において「発達段階」とは, 加齢に即して漸進的段階を経ながら進行する, 自然的発達の各段階のことである。

## 2. 2. 宗教傾性の発達との関係

次に, 発達段階論と「宗教傾性の発達」との関係である。これについて関は, 発達の各段階を通じて生起するのが宗教傾性の発達である, という。ただし, そこには「深淺高低」があり, 低次から高次への発達を想定している。宗教傾性の発達の要となる「人格宗教体験と宗教知識との結合は, 発達過程の時期時期に依って, その必至痛切とし福祉とするところに, 深淺高低があるので, 様々の幾多の結合があつて, 神人の結合は益々高く深く, 福祉は幸から祐へと高く深くなってゆく<sup>36</sup>」。このように捉えた場合, 各発達段階そのものが, 「斯か

<sup>30</sup> 関寛之(1929b). 児童宗教教育 東洋図書 p.119.

<sup>31</sup> 関(1933), 前掲書, p.17.

<sup>32</sup> 関寛之(1934). 児童学原論 増訂版 東洋図書 p.447.

<sup>33</sup> 関(1929b), 前掲書, p.119.

<sup>34</sup> 関(1933), 前掲書, p.17.

<sup>35</sup> 関(1934), 前掲書, p.447.

<sup>36</sup> 関(1944), 前掲書, pp.168—169.

る宗教経験の高低深淺の状態の示し方を異にする時期の区別<sup>37</sup>」ともなっている。それゆえ、発達段階と宗教傾性の発達の両者は、前者の内に後者が生起するとともに、後者の進展を反映するのが前者である、という関係にあるといえよう。

### 2. 3. 宗教性発達の各段階

『日本児童宗教の研究』の中で関が展開する段階論は、以下の通りである。段階は大きく3期に分かれる。第1期は「軽信期」と呼ばれ、10歳頃以前の時期である。本期はさらに「軽信期前期」（6歳頃まで）と「軽信期後期」（10歳頃まで）とに区分される。思考および感情が未発達で、伝承の軽信を特徴とする。第2期は移行期としての「検討期」であり、10歳頃から13歳頃までの時期である。思考の躍進がおこる時期であり、伝承を知的に検討しようとする。第3期は「覚醒期」で、14、5歳頃から20歳頃までを指す。この時期は感情の発達が著しく、思考も整理統制されていく。

後述するように（2.4. ），関の発達段階論は著作を重ねる度に微妙に変化していくのであるが、基本的な枠組みは変っていない。以下、各段階を概観してみよう<sup>38</sup>。

#### 2. 3. 1. 軽信期・検討期・覚醒期

軽信期の児童は、「伝承を何の批判もなく軽信し、世俗の習俗をそのままに模倣する傾向<sup>39</sup>」にある。ただし、その取り入れ方には児童期の特徴が表れており、受容できる範囲の内容を、受容できる形に変更しながら取り入れる。と

<sup>37</sup> 前掲書，p.169.

<sup>38</sup> 『日本児童宗教の研究』において、児童を対象とした調査の結果は、「神仏観」「信仰及び礼拝観」（以上、幼児期と児童期）、「人生及び運命観」，「未来及び靈魂観」，「宇宙及び本体観」，「自然現象観」（以上、児童期），の8項目に大別され、整理されている。結果の詳細については、同書第三編B（「児童宗教の構造」）pp.349—439. を参照。

<sup>39</sup> 関（1944），前掲書，p.148.

くに軽信期前期では、想像力の発達により、「活化」「擬人視」「人態視」された宗教的存在を認識する傾向が強い、という。

検討期に入った児童は、「...有らゆるものを自己の体験に照らして批判し、検討して、自己の精神統態を造ろうとする傾向<sup>40</sup>」を見せる。思考力の発達により、何事にも思考をもって反応しようとし、これまで軽信してきた内容について、実証・分析・批判・破壊の態度や行動を示すようになる。また、道徳的側面も強くなり、「...内容では左程ではないのに、何かと道徳を口にしたがる」。さらに、「思考の遊戯に陥る傾向」もみられ、「...宗教意識上に、この時期のみに乱立して、その前になく、その後に消滅又は整理されるような、泡沫の如き類型が、雨後の茸のように簇出する」時期でもある、という<sup>41</sup>。

覚醒期に入ると、宗教に対する分析的態度は統合しようとする態度へ、批判し破壊する態度は「建設し支持する態度」へと、それぞれ変化する。思考や感情が宗教的・哲学的となり、来世や超自然的世界に対する関心が高まってくる。また、感情の発達が顕著となり、それが「情操」のレベルに達する。この点について関は、覚醒期と検討期とを比較して、検討期を「思考躍進」の時期、覚醒期を「感情躍進」の時期と、それぞれ位置づけている<sup>42</sup>。

### 2.3.2. 各段階の特徴

以上の3時期の各特徴をまとめたものが、Table 2 である。本表では11項目の観点からの比較により、各時期の特徴が明らかにされている。軽信期の児童は、万物の由来を神に帰し、神仏・運命・応報などの観念をそのまま肯定する。神仏の表象を感覚的・可視的に捉え、神仏を人態視する。情緒面では、宗教的情操は未だ現れず、一般的な情緒が神仏などに向けられる。

<sup>40</sup> 前掲書, p.157.

<sup>41</sup> 前掲書, *ibid.*

<sup>42</sup> 前掲書, p.163.

Table 2 宗教性発達段階の特徴

観点	無信期	検討期	覚醒期
宗教内容への背否	事物を神に帰し、目的論的に考える。運命・応報・地獄・極楽は、神が設定し支配する所であり、神仏が自身の目的を遂行するために存在する。	事物を神に帰す傾向、人間に帰す傾向、また、事物自体に帰す傾向とが混在する。また、目的論的にみる傾向と、機械論的にみる傾向とが混在する。	事物を神に帰し、目的論的に考える。検討期での混在状態が、統合された形で解消されている。運命・応報は神仏が支配すると同時に、人間の関与も認める。目的論は、倫理的なものから宗教的目的へと変化する。
感覚的/観念的	素材に背走する。	検討し、疑惑をいだく傾向が強い。思考の遊戯による、泡沫のような思考の乱立・消失がみられる。	疑信からの肯定でも検討からの疑惑・否定ではなく、自覚に基づき合理的な判断をおこなう。神仏・運命・応報を肯定し、地獄・極楽については人間の心や社会に存在する、と捉える。
人態視/普遍視	感覚的・可視的・外観的に捉える傾向と、観念的・内観的に捉える傾向とが混在する。	人態視する傾向と、外観的に捉える傾向と、観念的・内観的に捉える傾向とが混在する。	観念的・内観的である。神仏は無姿だが人間の心や社会、宇宙、万象に遍在する。
想像力/実証	人態視する。神仏は人間に似た形姿をし、人間の言葉や感情をもつ。	人態視する傾向と、普遍視する傾向とが混在する。神仏は外部に存在するとも、内に遍在するとも考える。	物事を普遍視する傾向。神仏は社会の中に普遍する。
主我的/主他的	信仰内容において伝承の形跡が大きい。伝承や習俗の模倣が多い。	伝承の影響が残る。とくに宗教儀礼においては、無信期と同様、独自の形式はみられない。	---
投影	想像力に満ち、神話的に思考する。	想像力を用いる傾向と、実証し検討しようとする傾向とが混在する。	---
階級	主我的である。人生の目的や使命も主的に知えられる。神仏についても同様で、神仏は人間が自身を大切にしようになるために運命や応報を人間に課す。	主我的傾向と主他的傾向とが混在する。	主他傾向が増す。
情緒/情緒	自己を投影する。神仏の敬慕・思慕・感傷・報復は、児童自身の体験の投影である。	自己を投影する。	自己を投影する。
希求	神仏を階級づけ、評価する。無信期後期より顕著に現れる。	神仏を階級づけ、評価する。	神仏を階級づけ、評価する。
希求	宗教的感性や情緒が多く、一般的情緒が多含まれる。	宗教的感性や情緒よりは、一般的情緒が多いが、より複雑な情緒(美・愛・感・追慕など)が現れる。	情緒の要素を含んでいる。信仰・礼拝視、自然現象観の中に、美的・倫理的、宗教情緒が現れる。
希求	---	---	感覚的・物質的な希求が減じ、観念的・精神的希求が増大する。

検討期は覚醒期へと至る過渡期と位置づけられ、様々な思考傾向が混在する段階と捉えられている。すなわち、万物の由来について神に帰す傾向と、人間や事柄自体に帰す傾向とが混在し、また、万物にその目的を認める傾向と、万物はそれ自体の因果関係によって動くとみる傾向とが混在している。神仏の表象を感覚的・可視的に捉える傾向と、観念的に捉える傾向とが混在し、神仏の表象についても人態視と普遍視が混在する。情緒面においては、より複雑な情緒も現れ始める。

覚醒期に至った児童は、万物の由来を宗教的な目的論によって捉える傾向がみられるとともに、運命・応報などに人間の関与を認める傾向もみられる。神仏・運命・応報などの観念について、軽信期における素朴な肯定でも、検討期における疑惑や否定でもなく、自らの合理的判断によって対処しようとする。神仏の表象は観念的となり、人間や社会に内在し、あるいは遍在するものと捉える。情緒面では、一部に宗教的情操と呼べるものが出現する。

いずれにせよ、関の発達段階論の特徴は、「軽信期」から「覚醒期」へ至る発達段階に「検討期」という過渡的な段階を設定することにより、加齢による宗教性発達をより簡易に説明しようとした点にある、といえるだろう。

ここでとくに留意しておきたいことは、このような図式化によってはうまく説明できない側面、すなわち宗教的情緒の発達の側面が、この段階論の中に組み込まれているという点である。神仏観念などの宗教的思考においては顕著な変化がみられるのに対し、宗教的感情の発達については、検討期における特徴がそれほど顕著ではない。また覚醒期においても、全般的で顕著な宗教的情操の出現がみられるわけでもない。このことは、宗教的情緒ないし情操の発達が、彼自身の説く3段階によっては説明できず、むしろ別の異なる段階を経る可能性があることを示唆しているのではないだろうか。

## 2.4. 発達段階の変遷

先に、関において「発達段階」とは、加齢に即して漸進的段階を経ながら進行する自然的発達を区分したものであることをみた(2.1.)。加齢に即した宗教性の自然的発達を記述するのが発達段階であるとするれば、その際まず問題となってくるのは、その根拠となる年齢の範囲で発達時期を区切る「発達区分」であろう。

しかしながらじつは、関の一連の著作において、この発達区分は定まったものではない。そしてさらに、それに応じて、宗教性発達段階の各時期の名称および年齢も、特段の理由も付されぬままに、揺らいできたのである。発達区分の変遷について Table 3 に、宗教性発達段階の名称の変遷について Table 4 に、それぞれまとめた。

Table 3 をみると、「幼少期」は最少2歳から最長10歳までの幅がみられ、「少年期」は最少7歳から最長15歳まで、「青春期」は最少13歳から最長25歳までの幅がみられる。また、「児童期」の名称は、当初は「胎児期」から「青春期」までの広範な時期を総称するのに用いられており、固有の時期を示す名称として用いられるのは1929年以降であったことがみてとれる。

次にTable 4 をみると、「軽信期」の名称は1920年代からみられるが、『日本児童宗教の研究』において最終的に「検討期」とされた時期は、それ以前は「懐疑期」の名称で説明されていたことがわかる。さらにまた、当初は「懐疑期」と「覚醒期」との間に、短い停滞期としての「高原期」を置いていたのが、1938年以降にはその記述がみられなくなっていることがわかる。

関の著作における、発達区分やそれに伴う宗教性発達段階の名称についての以上のような変遷が、いかなる事情によるものであるかは、関自身の記述がみられないため、今後の詳細な検討を待つ必要があろう。少なくとも現時点で推論されるのは、関において発達区分、宗教性発達段階の名称や区切り方などは、執筆時において最適であるものを提供すればよく、自らの宗教性発達理論と

Table 3 関における発達区分の変遷<sup>1)</sup>

	1920 <sup>2)</sup>	1924 <sup>3)</sup>	1927 <sup>4)</sup>	1929 <sup>5)</sup>	1930 <sup>6)</sup>	1938 <sup>7)</sup>	1944 <sup>8)</sup>
発達区分	0～40週	受胎～出生				取得経験時代	
胎児期	0～3歳	出生～1歳		生後3歳頃まで	出生～1歳	基本的経験期	
嬰兒期	3～10歳	2～6歳	2～7歳	4～6歳頃	2～6歳	総合的経験期	4～6歳
少年期	10～15歳	7～12歳	8～15歳	7～9歳頃	7～15歳	実証的経験期	7～15歳
青春期	15～25歳	13～23歳	16～23歳	10～12歳頃 13～15歳頃	16～23歳	組織評価時代 社会的前駆期	7～15歳 16～23歳
備考	「児童期」の名称は胎児期から青春期までの総称として記載されている。各時期はさらに前期と後期に分される。少年期を「少年少女期」と呼ぶ。						

1) 経年順に、変更箇所のみ記載した。記載のない時期については斜線で示した。  
 2) 関寛之 (1920) . 児童学に基づける宗教教育及日曜学校 洛陽堂 pp. 9—10.  
 3) 関寛之 (1924) . 児童学原理 アテネ書院 p. 7 inf.  
 4) 関寛之 (1927) . 児童学原論 東洋図書 p. 5.  
 5) 関寛之 (1929b) . 児童宗教教育 東洋図書 p. 76 inf.  
 6) 関寛之 (1930) . 高等教育児童心理学 東洋図書 p. 5.  
 7) 関寛之 (1938) . 日本宗教教育 東洋図書 p. 81 inf.  
 8) 関寛之 (1944) . 日本児童宗教の研究 彰考書院 附表

「児童期」の名称は胎児期から少年期までの総称として記載されている。各時期はさらに前期と後期に分される。少年期を「少年少女期」と呼ぶ。  
 「児童期」の名称は胎児期から青春期までの総称として記載。  
 少年期を「児童期」3  
 発達時期を「取得経験時代」3期、「組織評価時代」2期、「生産退却時代」、「追懐運行時代」に区分。少年期の名称は「児童期」を2期に区分する。

Table 4 関における宗教性発達段階の変遷<sup>1)</sup>

	1920 <sup>2)</sup>	1924 <sup>3)</sup>	1927 <sup>4)</sup>	1929 <sup>5)</sup>	1930 <sup>6)</sup>	1938 <sup>7)</sup>	1944 <sup>8)</sup>
脛信期	10歳頃まで。	脛信期	脛信期	10歳頃より以前。	脛信期 10歳頃まで。	素材期 1～3歳頃	脛信期 10歳頃まで。
第一懷疑期	10乃至12歳より15歳まで。	懷疑期	懷疑期	10歳頃より、11～13歳を中心として、15歳頃まで。	懷疑期 11～12歳頃から 14～15歳頃。	伝承期 4～9歳頃	検討期 10～13歳頃まで。
懷疑停止期	15歳より18歳まで。	高原期	高原期	高原期 極めて短い。一年程度。15歳頃。	高原期 (説明なし)		
第二懷疑期	男子は18歳・女子は16歳を絶頂として青春期中継続する。	覚醒期	覚醒期	男子は18歳頃に、女子は16歳頃に、高頂に達する。	覚醒期 15～16歳頃より。	覚醒期 15歳以後	覚醒期 14～20歳頃まで。
改造期	30歳頃までに来る。	改造期	改造期	改造期	改造期		

増訂版  
(1934)において、改造期は「確立期」に変更されている。

- 1) 経年順に記載した。記載のない時期については斜線で示した。
- 2) 関寛之(1920)．児童学に基づく宗教教育及日曜学校 洛陽堂 p. 269.
- 3) 関寛之(1924)．児童学原理 アテネ書院 p. 368.
- 4) 関寛之(1927)．児童学原論 東洋図書 p. 424.
- 5) 関寛之(1929b)．児童宗教教育 東洋図書 pp. 121-122.
- 6) 関寛之(1930)．高等教育児童心理学 東洋図書 p. 140.
- 7) 関寛之(1938)．日本宗教教育 東洋図書 p. 88.
- 8) 関寛之(1944)．日本児童宗教の研究 彰考書院

の照合はとくに必要のないものであった、という可能性である。むしろ関にとっては自らが手にした調査結果のほうが重要であり、そのデータが示すものをいかに詳細に分析整理し、提示していくかに力点を置いたのであろう。

## まとめと展望

関の宗教性発達理論の中心的概念は、人間に備わる「宗教傾性」、すなわち宗教活動を生起させると共にそれを可能にする傾向であった。宗教傾性には、神仏などの宗教的存在を設定し、それとの結びつきによって「福祉」を享受し自らの生命を拡充してゆく「生命拡充傾性」と、その生命拡充傾性に、児童の一般的心性や児童をとり囲む種々の環境といった特殊性を与えていく「生命拡充特殊傾性」とに大別される(1.2.)。

児童期の宗教性発達は、この宗教傾性の発達に他ならない(1.3.)。その発達プロセスは、以下の通りである。嬰兒期より始まる信頼者との接触や、人・社会・自然との接触経験を通して、人格体験および宗教感情から成る宗教体験が児童のなかに準備されていくが、成長と共にこれまで信じてきた内容に対する疑義が生まれ、かつ「生命の必死痛切の要求」が起り始める。すると、これまで蓄えられていた宗教知識も用いられて、自ら新たな「真の宗教体験」を獲得してゆくのである。

これに対して、発達段階論(2.1.)については、加齢に応じた自然発達を整理する、といった程度の位置づけであり、それほど重視されていない(2.3.)。発達段階と宗教傾性の発達との関連について言及がないわけではないが(2.2.)、それほど積極的な議論はみられない。さらに、発達段階そのものも、年代と共に揺らぎをみせている(2.4.)。

以上のように、関の宗教性発達理論には、確固として展開している部分と、揺らぎを見せている部分とが混在している。この点は、関自身の探求の関心が

いったいどこにあったのかという問題とも繋がってくるだろうから、今後さらに追求してゆく必要がある。

今後の課題として、以下の点が挙げられよう。第1に、本小論では言及出来なかった、彼の調査結果の整理である。すなわち、彼が調査研究によって何を見出したのかを把握すること、である。そのことが、関の宗教性発達理論のより正確かつ精緻な理解に繋がってゆくであろう。第2に、関の一連の研究成果を、明治期から昭和戦前期に至るまでの、日本における宗教心理学史、とりわけ児童期の宗教性発達研究史の中に位置づけていくことである。児童期に限っていえば、関ほどに長期にわたり、また広範囲に、かつ詳細に調査研究を行った研究者はいないが、散発的であれ重要な研究が存在している。これらの研究成果との比較を通して、関が残した研究成果のみならず、関の研究に対する客観的な評価も定まってくるに違いない。

#### 引用参考文献

金児曉嗣（監修） 松島公望・河野由美・杉山幸子・西脇良（編）（2011）. 宗教心理学概論 ナカニシヤ出版

関寛之（1920）. 児童学に基づける宗教教育及び日曜学校 洛陽堂

——（1924）. 児童学原理 アテネ書院

——（1927）. 児童学原論 東洋図書

——（1929a）. 児童の宗教心理及教育 二松堂

——（1929b）. 児童宗教教育 東洋図書

——（1930）. 高等教育児童心理学 東洋図書

——（1932）. 訓練及管理の実際に応用したる児童心理学 文化書房

——（1933）. 児童の宗教意識 宗教生活叢書 13 大東出版社 pp.1—51.

——（1934）. 児童学原論 増訂版 東洋図書

——（1938）. 日本宗教教育 東洋図書

—— (1944) . 日本児童宗教の研究 彰考書院

竹中信常 (1957) . 宗教心理の研究 青山書院